

令和8（2026）年度10月「歳時記」

神無月——深まりゆく秋、山里に響く子どもたちの声

神無月、10月。山の気配はさらに深まり、秋は静かにその輪郭を濃くしていきます。

4日には、県無形民俗文化財に指定されている「流鏑馬」が堀八幡神社で行われます。

馬の蹄音と弓を射る音が山間に響き渡り、秋の澄んだ空気に、凜とした緊張感と華やきを添えます。地域に受け継がれてきた伝統が、今年もまた秋の風景を彩ります。

8日頃には二十四節気の「寒露」を迎えます。朝夕の冷え込みが少しずつ増し、草葉に宿る露もひんやりと冴えてきます。澄みわたった空には鳥の声が高く響き、山々の木々も少しずつ色づき始めます。季節は確かに、秋の深まりへと歩みを進めています。

12日は「スポーツの日」です。今月は、町内の一つの小学校と二つの認定こども園で運動会が開かれます。子どもたちの元気な声や軽やかな足音、応援する保護者や地域の皆さんの声が秋風に溶け込み、山里に明るい活気をもたらします。色づき始めた木々の間を懸命に駆ける子どもたちの姿は、運動会ならではの心温まる風景です。

23日頃には、二十四節気の「霜降」を迎えます。山の空気は一段と冷たくなり、紅葉も見頃を迎えます。朝の畑にはうっすらと霜の気配が感じられ、落ち葉は乾いた音を立てながら足元に積もっていきます。農家では冬支度が始まり、薪を割る音など、冬を迎える準備の気配が山里のあちらこちらに感じられる頃です。

24日には、中学校合同文化祭が開催されます。町立中学校2校の生徒たちが集い、日頃の学びや活動の成果を発表します。秋の深まりとともに、子どもたちの成長を感じる一日となることでしょう。

10月は、澄みきった空と鮮やかに色づく山々が美しく交わる季節です。伝統行事、学校や園での活動、そして日々の暮らし——。さまざまな営みが秋の風景の中に溶け込んでいます。

深まりゆく秋の安芸太田町。静かな山のたたずまいの中に、子どもたちの声や地域の営みが響くこの季節は、私たちに、受け継がれてきたものと、これから育っていくものの

たいせつ かん
大切さを感じさせてくれます。

<古文>

もののふ ちからつよ や 物の つよ い ゆみ あるじ もののふ
武士のもとに、力強くして矢をはしらかし、物を強く射さする弓あり。主の武士これ
あい これ お おも たから え ひと ゆみ や は
を愛し、是ををしみて、重き宝とおもへり。ある人、この弓をとりて、矢を矧げてひかん
とするに、強くしてひくにあたはず。かるがゆゑに、おとをも射ず、物にも強くも立た
ず。是がやうに、ちから ひと どうとう ほっけ しんごん う
力は、ある人は堂塔をもつくり、法花・真言をもつとめおこなふべきなり。
ちから ねんぶつ よわゆみ い おのづから い あて こと あ
力なきわれらは、念仏の弱弓をもて射ば、おのづから射当つる事も有るべし。たとへば、
げんじょう い び わ て ひきならはしたる琵琶をもて、
おのづから 心 すみておもしろきがごとし。ねんぶつ くとく またまた
念仏の功德も又々、かくのごとし。

<口語（現代語）訳>

ぶ し ちからつよ や はや と 物の つよ い ゆみ も ぬし
武士のもとに、力強く矢を速く飛ばし、物を強く射ることができる弓があった。持ち主
の武士はこれを愛し、これを大切に、大事な宝物だと思っていた。ある人がこの弓を
も 持て、や ゆみ ひ つよ ひ
矢を弓のつるにかけて引こうとしたけれど、強く引くことができない。だか
ら、おと た い 物の つよ い ちから
音を立てて射ることもできず、物を強く射ることができなかった。このように、力が
ある人は寺院の堂や塔をつくり、法華宗や真言宗の修行をすることができるに違いな
い。ちから わたし ねんぶつ だれ あつか よわ ゆみ い しぜん い あ
力がない私たちは、念仏のような誰でも扱える弱い弓で射れば、自然と射当てるこ
ともあるだろう。たとえば、げんじょう び わ ひ じゅうぶん ぎりょう おと
玄象という琵琶は、弾こうとしても十分な技量がなければ音
を出すことができない。ひ な び わ ひ しぜん ころ す
弾き慣れた琵琶を弾けば、自然と心が澄んでおもむき深く感じる
ようなものである。ねんぶつ くとく
念仏の功德もまた、このようである。

こんげつ やぶさめ ゆみ だいざい さくひん えら ぶ し たいせつ
今月は、「流鏑馬」にちなんで、弓を題材にした作品を選びました。武士が大切にしてい
る強い弓は、ちから ちから ひ やく た どうとうこんりゅう みつきょう しぎょう
力があれば引けず役に立ちません。これは、堂塔建立や密教の修行の
ような大きな功德（良い行いによって生まれる、心の豊かさや幸せのこと）を、ちから
おお くとく よ おこな う ころ ゆた しあわ
大きな功德（良い行いによって生まれる、心の豊かさや幸せのこと）を、力あ
る人だけが成し得ることのたとえです。一方、いっぽう よわ ゆみ あ
弱い弓でも当たることあるように、ねんぶつ
念仏は誰でも行え、しぜん くとく え
自然と功德を得られます。この古文の出典は「宝物集」、このように

みちか もち ねんぶつ へい い しゅぎょう か ち と せつわしゅう
身近なたとえを用いて、念仏という平易な修行の価値をわかりやすく説く説話集です。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

＜問題＞

問1 古文で、強い弓を使えない人のたとえとして示しているものを選びましょう。

ア 弓の扱い方を知らない人 イ 力が弱くて強い弓を引けない人

ウ 弓を持っていない人 エ 弓をこわしてしまった人

問2 古文で「玄象」という琵琶が出てくる理由として正しいものを選びましょう。

ア 玄象は誰でも簡単に弾ける楽器だから

イ 玄象は音が悪い楽器の例として出てくるから

ウ 玄象は名器だが、慣れていないと弾きにくいことを示すため

エ 玄象は念仏と関係のない楽器だから

問3 古文で「力なきわれら」が用いるべきだとされているものを抜き出しましょう。

問4 古文では、強い弓と弱い弓のたとえを使ってどのようなことを言おうとしていますか。50字程度の現代語で説明しましょう。

＜解答例＞

問1 イ 問2 ウ 問3 念仏の弱弓

問4 力のある人は難しい修行ができるが、力のない人でも念仏という簡単な方法で救われる可能性があることをたとえで示している。